



Title	道の途中で : 生きもの
Author(s)	大貫, 惇睦
Citation	大阪大学低温センターだより. 2014, 162, p. 17-18
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47005
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

道の途中で一生きもの一

琉球大学理学部 大貫 惇睦*

前回の“樹木”で“キノボリトカゲ”の絵を載せたが、それを描いたのは今年の6月頃かと思う。琉球大学のキャンパス内で何度も見かけ、そのたびに捕らえようとしたがアッと言う間に木に登られて逃げられたが、ある時運良く一匹学生さんと一緒に捕らえた。しかも、日を置かずして我が家の小さな庭の木に登ってジッとしていたキノボリトカゲを見つけたので、うれしさのあまり描いた次第です。体色はカメレオンのごとく変化するが、何とも愛嬌がある。学生さんがカゴで飼っているが、極低温センターの坂道で捕らえたバッタをカゴの中に入れると、パッと食べてしまう。それもまた楽しい。今回はそんな日頃見かける沖縄の“生きもの”に触れてみたい。

本土ほど際立っていないが、沖縄にも四季に近い気候があり、特に春の動植物の繁殖の時期に“生きもの”は活発になる。朝、甲高い“イソヒヨドリ”の鳴き声で目がさめる。6時頃である。本土との時差が1時間くらいあるので、本土では5時頃に相当するでしょうか。日曜日の朝などはゆったりとした気持ちで鳴き声に耳を傾けていると、何と言っているか考え込んでしまう。「コッチダ~コッチ」と言ってみたり、「コッチデス」と言っているようにも思える。大きさはツバメよりちょっと大きいぐらいで、雌は黒茶で地味である。雄の方はやや胸の方がダークブルーの構造色で、ちょっと目立つ。人になついていて近づいても逃げない。キャンパスで年中見かける鳥はこのイソヒヨドリと鳩である。小ぶりの“スズメ”を見たことはあるが、めったに見かけない。カラスも見かけない。名護の山に行ったとき見かけたので、山にはカラスはいるようである。本土のカラスと姿形は変わらない。都会のゴミをあさるカラスはいないので、ゴミの収集でネットを張ることはない。

何と言っても蝶は数が多く、色鮮やかである。キャンパスで良く見かけるアオスジアゲハは動きが俊敏で群れている。手元に網があったら捕ってみたくなる。中でも感動したのはオオゴマダラである。理学部と極低温センターをさしわたす橋があるが、橋の下は小さなジャングルさながらで、池とそれを囲む樹木が眼下に広がっている。橋に立つ私の目の前をゆったりと遠ざかるオオゴマダラを見たとき、その様は現実とは思えない一瞬であった。羽をほとんどはばたくことなく、やさしい風に乗って眼下を去っていったのである。このオオゴマダラは多くの施設でケージの中で飼育し、さなぎが金色なので観光客を喜ばせている。ただしケージの中では私が見たその勇姿を想像できないでしょう。凛として他を寄せつけない品格を感じました。この蝶は毒草を食べて育つので鳥には食べられないと言われているが、本当だと思うようになりました。

私たち夫婦は、沖縄ではごく普通のコンクリートの一戸建ての小さな借家に住んでいます。1年ぐらい空き家になっていたせいか、庭は月桃やつる草が繁茂していた。また、家の中では“ヤモリ”

*大阪大学名誉教授

がチヨロチヨロと動きまわっていた。極低温センターの実験室で奇妙な鳴き声があるので、あれは何ですかと学生さんに聞いたら、ヤモリの鳴き声とのこと、沖縄では“ヤモリ”は家守（家の守り神）なので殺さないとの説明を聞いた。そんな訳で何もしないので今でもしばしば出会ってお互いがドキッとする。住んでいる家の寝室兼居間の天井が変わっている。中央の部分に障子のはまっでいてその上は何もない空間で、本来の天井には蛍光灯がある。障子を通して寝ている私達に明かりが届くようになっている。その障子の上をヤモリが影絵となって歩くのを見たときは何ともゾッとしました。

庭の木にはつるがびっしりとからみついでいて、驚いたことにてっぺんの樹木の葉の所ではその葉とほとんど同じような葉で繁茂していた。そのつるを取り除こうとして剥がしたら、たくさんの“アリ”の巣で満ちていた。この“アリ”を退治したので、家の中に入ってくる“アリ”はかなり減少した。また、月桃を取り除いていたとき、びっくりするくらい大きな“カタツムリ”がたくさんいた。アフリカマイマイである。若い頃、幻想・怪奇小説が大好きで夢中になって読んだが、カタツムリも小説の題材の一つで、草の葉をバリバリと食べていたことを思い出す。死者の名を告げる“コオロギ”、恋人の死を知らせる“ホタル”等も幻想・怪奇小説の題材である。“青いホタル”と題した短編にホタルが登場する。本土のホタルは川で育つが、沖縄のホタルは落ち葉の下でミミズなどを食べて陸上で育つ。第二次世界大戦後の米軍の占領下にあった西表島で一人の兵士が遭遇した物語である。

「…ポーッと青く点るホタルは初めてだ。更に進むと切り立った崖にたどり着いた。足下に青く点る大きなかたまりがあった。思わず両手で掬い上げると、モゾモゾとした感触とともに光が両手からこぼれ落ちていった。そして両手には大きなかたまりが残った。目を凝らして見ると頭蓋骨のようであった」

追伸

我が家の“アリ”と“カタツムリ”との戦いは、家内が庭の手入れをこまめにしているせいか、その数は一年経って激減した。ところが、ある時期どこからともなくどっと現れ、いまだ戦いは続いている。



本土のカラスウリのようなオキナワズズメウリ